

「生きる力を支える確かな学力を育むための指導の工夫」 —体験的学習の充実を通して—

I 研究の内容

1 研究のねらい

- (1) 生きる力を知の側面からとらえた「確かな学力」の定着，本校の「めざす子ども像」における『学ぶ意欲をもち，自ら学び・考え・判断してよりよく問題を解決するとともに，主体的に表現することができる子ども』の育成をめざす。
- (2) 体験的な学習を知識の習得場面，あるいは知識の活用場面に取り入れ，友だちとの共同作業や言語活動との統合など，様々な活用を考えながら，「確かな学力」の定着にむけての有力な手だてとする。

研究
仮説

教科学習・総合的な学習において，体験的な学習を取り入れ，工夫して指導していくことで，学ぶ意欲をもち，自ら学び・考え・判断してよりよく問題を解決するとともに，主体的に表現することができる「確かな学力」を育むことができるだろう。

2 研究の内容

- (1) 新学習指導要領に則った「確かな学力」，「体験的な学習と指導の工夫」についての理論研究
- (2) 体験的な学習を取り入れた学習活動の研究と実践
 - ア 指導計画の作成と指導方法の工夫
 - イ 体験的な学習の特質を生かした授業実践
- (3) 外国語活動研修

3 研究の実際

(1) 学習会

- ア 「体験的な学習について」
- イ 英語活動研修

講師：義務教育課指導主事 小林 大先生
講師：ALT アン・チェン

(2) 授業研究

第4学年授業研究 算数 「垂直・平行と四角形」

- ・日 時 平成22年11月22日(月) 5校時
- ・単元の目標 直線の垂直・平行の位置関係や台形・平行四辺形・ひし形などの概念について理解し，その弁別力・作図力を高めるとともに，これらを用いて図形の性質をとらえることができる。
- ・研究討議
 - 学習規律や学級集団づくりといった授業の前提，基礎となる部分がしっかりできていた。そのため具体的な操作活動もスムーズで，考えを発表し学び合う学習活動も認め合い高め合う学習集団であることが感じられた。
 - 活動①4本の直線でいろいろな四角形を作る 活動②できた四角形を自分なりの理由をもとに仲間分けをするという活動は児童にとって明確に理解でき，授業案の中に示された活動のねらいにも添うものだった。
 - 本時の体験活動は，主に既習の学習内容を活用するものであったが，四角形などの定義に関わる知識・理解の面や直線のひき方，直角のはかり方など処理的な面でも既習の内容が定着し，体験活動にも生かされていた。
 - グループ活動などの設定はなかったが，学級全体で，目当てを共有し，共に探求し，成果を認め

合う「学び合い」が展開されていた。

- 考えを発表するという言語活動は限られた児童であったが、四角形の仲間分けの理由について全員が文章で表現できたことがよかった。算数においては、言葉による表現だけでなく、図や式、数直線等自分のやり方で考えを表現する活動を積み重ねていくことが重要である。
- 学習環境づくりや机間巡視による児童への支援や評価、実物投影機による提示や全員に同じ四角形をかかせみんなに共通な四角形を持たせるという配慮など学ぶべき指導技術がたくさんあった。
- 単元の導入で作ったカードは、垂直、平行と学習が進むなかでも活用し、正方形・長方形、平行四辺形や台形など四角形の分類にも有効だった。児童が自分でかいたカード（四角形）なので身近で理解も深まる。
- 手や体を使って、垂直・平行をあらわしたり、角度や長さなどを表現させたりする活動は、直線と直線の関係や量の感覚をとらえるために繰り返し活動させ定着させたい。
 - ・主目標である垂直の意味については、次時においてさらに確実な定着を図ってほしい。
 - ・隣同士や班などのグループ活動の活用、四角形のグループ分けをした後のカードの処理（ホワイトボード、磁石の活用）など、体験活動をより効果的に確かな理解へとつなげるための工夫を考えていく。

(3) 体験的学習を取り入れた実践報告

II 成果と課題

- ・体験的な学習の充実を通して、「確かな学力」の定着を目指した。体験を通して学ぶ、あるいは学んだことを体験に生かす活動は、児童の意欲を高めるとともに、知識・技能の定着や思考力・判断力・表現力の育成という点においても効果を実感でき、研究テーマとして適切だったと考える。
- ・体験的な学習が明確なねらいを持って、適切に位置づけられ、体験を生かす有効な手だてをもって展開されたときには、「確かな学力」の育成につながることは、昨年度までの研究ともあわせて実感できるものだが、ねらい・位置づけ・どう展開していくかについては、さらに研究を深め・実践していく必要があると考える。
- ・理論研究について、資料と指導主事を招いての学習会において一応の共通理解を図ることはできたが、研究組織の変更もあり、学んだ理論を十分実践に生かすところまでいかなかったように思う。もう少し焦点を絞った理論研究が必要だった。
- ・授業研究について、研究組織の変更により部会もなくなり、研究授業が1本になってしまったが、全体で1本の授業に向けて教材研究や授業の展開について検討を深められたことは、意義があった。一人一実践の取り組みにより、各自テーマにそった実践が報告され、それらを共有することも有意義であったが、可能であれば2～3本の授業研究が望ましいように思う。
- ・研究授業については、体験的な学習の展開のポイントとして提示した4点
 - ①体験のねらいを明確にする。②既修の知識・理解を活用した問題解決的な学習活動の過程に位置づける。③めあてを共有し、共に探求し、成果を認め合うなど「学び合い」の中で展開する。④「言語活動」と組み合わせることによりより深い理解にかえる。が網羅され、体験的な学習（算数的な活動）が効果的に取り入れられたテーマにせまる授業実践だった。さらに、学習環境づくり、学習規律、学習集団づくりなど、授業の基盤となる部分がしっかりしていたことも重要なポイントだったと思う。

III 成果物

- 1 第4学年算数科指導案「垂直・平行と四角形」
- 2 各学年体験的学習実践報告書

(研究主任 清水 利子)